

随想



署

蔵原 惟和

「署」という字について調べてみた。字源によると、やくわり、てわけ、てわけする、とある。語源は、中国は魏の三国時代、項羽紀に発するとある。すなわち、西暦二〇〇年時代、倭の邪馬台国の女王卑弥呼が使を出したとある時代のこととて甚だ古い。広辞林には、つかさ、やくしょとある。何れにしても、庶民を治める役割をもつ役所を意味することが判る。そう言えば、署は荘重且重みのある字である。

署の字に興味を抱いたのは、つい先日確定申告で税務署の玄関を潜ったときに

眺めたときである。確かに税務署は、国の財政を司る役割を持っている。語源に相応しい役所である。

ところで現在熊本県に、署のつく役所はいくつあるかと考えてみたら、五つしか思いつかない。

前記の税務署のほかに、消防署、警察署、営林署、それに労働基準監督署である。刑務所は、最も署に似合うところであると考えたが、所である。昔は監獄と呼ばれ、その長を典獄と呼んだ。たゞ法律は刑務所法ではなく、旧態依然として監獄法が罷り通っている。

署と所では、随分と感じが違う。確かに前記の五つの署は、字の意味する通り、司る役所であって、重みはあるが、私共庶民にとっては親しめるイメージではない。官尊民卑の国民性が、抵抗感なく受け入れているだけであろう。その意味では、刑務署とせず刑務所とした感覚の方が、より近代的な賢明な考え方であったと言えよう。

ことに親しまれる税務署の提唱も、愛される共産党と同様、鎧の上の衣裳の平清盛流なニューアンスに富むが、それでも税務署の火事を見て、ヤジ馬が抱き合っている漫画が大喝采を拍した時代（もっともこれはフランスのことで我が国のことではありません）は遠くなっただことは事実で、私自身が肌で感じた。

古今の感に耐えぬのが税務署で、署の字も余り威圧感がない。

警察署には三年に一度必ず行く。免許証の切換えに。従って格別の印象はないが、ただお巡りさんの態度の優しいことに驚く。戦前の学生狩りの体験者としては、それこそ太陽が西から出た以上である。消防署には余り縁がなく、年一回消防協会の会合に居眠りする程度のことだ。これも署の看板が重すぎる気がした。営林署は格別である。

労働基準監督署だけは、流石に署である。同業の者には、昔税務署今監督署が通り相場のようである。人間は意識して法違反をすることは少ないが、工場内の事故や、安全規則違反など、人間の意識を超える場合がある。だが不可抗力は理由にならぬ場合もある。重箱の隅を妻揚子ではじくる断を思いつくことすらある。

裁判所ですら所である。そろそろ署の字が消えてもよいのではないかと愚考した。（会長社長）

ひとり旅

園田 道子

好奇心の強い人間ほど旅行が好きらしい

いが、子供の頃から未知の世界への憧れが人並以上であった私など、世界中のどこもが、『一度は行ってみたい場所』である。

旅行の楽しみには人それぞれ種々様々なものがある。例えば、各地の名物を食べ歩くのが一番の楽しみだと言う人もあれば、もっぱら古代の遺物を見て回る人もある、というふうだ。私はと言えば、ただしばらくの間、知らない土地に居るといことが好きなのである。だから、『一度は行ってみたい場所』というのにも本当は、『どこでもいいから知らない場所』ということになる。初めての土地を歩き、そこに住んでいる人たちをながめ、自分だけが、その土地とそこに生きている人たちに関係なく歩いているのだという考えが、私は気に入っている。実際に自分が生活している土地を現実の世界だとすると、初めての土地は自分だけが第三者になれるという小説の中の世界だと言えないだろうか。もっとも、この場合、旅行とはひとり旅に限る、ということになる。

私はひとり旅が好きだ。往復の列車の中でひとこと言葉を交わすこともなく、見交す目もなく、ただ窓の外をながめているのが好きだ。ただし、女のひとり旅のせいで話したくもないのに話しかけら

れるということは覚悟しておく必要がある。多くの場合、同席している乗客の中で、まず最初に話しかけてくるのは婦人、それも中年以上の婦人である。「おひとりですか。」「私がそうだと答えると、「どちらまで。」「とくる。もしもかなり遠くの地名を答えたすると、「まあ、それは……。」と大変な目で見られることになる。若い女がひとりで旅行などして、と言出しそうな目である。しかし、私の方も慣れたもので、こういう時それ以上しゃべらなくて済むようにベツクの中には必ず文庫本を用意してある。ひざの上に本を開けば、どんな人でもそれ以上何か聞こうとはしなくなるものだ。

昨年の秋、京都に友人を訪ねた。京都は二度目だったことであって最後の一日を、ただ歩くことに費した。山沿いの細い道を歩いたり、山の中腹に見えかくれしている寺の大屋根を目指して坂道を上ったりしたが、どこをどう歩いても旅行者がいるのには驚かされた。しかも、ひとり旅の女性が多い。それは若い女性向きの雑誌が競って京都を特集しているためだけでなく、もともと京都という街にはひとり旅をするのがふさわしいからかも知れない。

私は二年続けて秋の京都に旅をした

が、旅行にシーズンがあるにしてもそれは目的次第だろう。私のように『どこでもいいから知らない場所』を探して歩く旅には、シーズンなどあってないようなものだ。とは言え、春の嵐も過ぎた今頃になると、外に飛び出したいた気持ちにかられてすぐにでも旅に出たくなる。

さて、この春はどこへ出かけたものだろうか。（OL）

むかしの仲間

本田 真一

△……春になれば草の雨。三月、桜。四月、すかんぼの花のくれない。……▽
木下左太郎の抒情小吟の一節である。いま時分になると、いつも私の口の端にのぼってくる詩句ではある。

今年の賀状の束に、珍しくAからのものが入っていた。実に二十数年ぶりである。遅れ走せながら、こちらからも早速投函しておいた。

終戦直後、私たちは八代で遑早く同人誌「無門」を創刊し、文芸復興の旗幟を掲げた。Aも同人のひとりであった。旅順からの引揚者で、帰郷後は古本屋を

やっていた。店はみすぼらしかったが、世の中が文化に餓えていることもあって、結構収入は良いようであった。詩人としては無暗と「純粹」のみを心掛ける余り、その作品は蒸溜水のように味気なかった。太宰治の信奉者で、酔うとよく「ギロチン、ギロチン、シュルシュルシュ」などと口走り、手にしたコップをカチリノと合せにきた。「斜陽」に出てくる場面の真似であった。同人の殆んどは三代であり、兵隊や外地で喪失した青春を一拳に取戻そうとしていたのかも知れない。私たちは気負っていたが、現実はその甘くはなかった。経済面から破綻がきて、「無門」は七号にして潰れた。

花火線香のように美しく、短かった。Aの古本屋も、新刊書が腹を切ったように溢れ出すと、顧客もガタ減りし、閉店の止むなきに至った。Aは手づるを求め、市の選管に動めはじめた。しかし、臨時雇いという身分に深い不満を抱いていたようにみえた。

その間、私たちは性根もなくなり、間歇的に薄っぺらな雑誌をいくつか出してきた。しかし、二十五年十月に創刊した「在野群」を最期として、私たちの同人誌は全く姿を消した。それまで雌伏していた同人たちがそれぞれ恰好の職を得て、ちりぢりになったからである。

Aも福岡の石油会社に正社員として迎えられた。Aやその家族をどうして送ったか、定かな記憶が私にないところをみると、私も何見かの父となり、ようやく公務員としての勤務に本腰を入れはじめたのだらう。Aはそれっきり消息を絶った。こちらから二、三度手紙を出したが梨の礫であった。思うに、不遇だった八代時代を顧みて、「石をもて追われるごとくふるさと」と自分に言いかけているのかも知れなかった。

つい先頃、Aの妹と列車の中でベッタリ出会った。「兄も昨年、家を新築しました。福岡の方へお出掛けの節はお寄り下さい」といった。Aとの交際が昔どおり続いているものと思いついでいるふうであった。それでも、Aの健在を確かめて、何となくホッとするものがあった。

△むかしの仲間も遠く去れば、また日頃顔合わせねば、知らぬ昔とかわりなきはかなさよ▽と私は夜汽車の窓にむかって呟いていた。（詩人）

